
俺の姫サン。

うきわ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の姫サン。

【Nコード】

N9912U

【作者名】

うきわ

【あらすじ】

俺はずっと想い続けてるヤツがいる。だけどソイツとの間には幼馴染という厚い壁がある。近くにいるのが当たり前。そう、近くて遠い、そんな関係。一途に幼馴染を想い続ける少年の話。

ブログ・・・ってか？（前書き）

これは以前書いた短編「僕の姫サマ。」とはまた少し違う物語です。少し似ているかもしれませんが、この作品とは関係はありません。

ブローグ・・・ってか？

ずっと、好きなヤツがいる。

だけど、ソイツは俺のことなんてちっとも気にしないで

今日も笑いながら俺に話しかける。

馬鹿だよな。

いや、ソイツじゃないぜ？

俺が。

振り向いてもらえねーの分かってるくせにさ。

もしかしたら・・・なんて思っちゃってさ。

ほんとと俺って馬鹿だよなあ。

ソイツは俺のこと幼馴染としか思っていないだろうよ。

あー。

ほんとと嫌になる。

なぜ俺等を幼馴染おれらにしたんだよ。

神様ってひでーよなあ。

こんなに想っているのに。

いつそ幼馴染じゃなかったら。

振り向いてもらえたのだろうか。

・・・なんて、な。

淡い期待だぜ。まったく・・・。

でも、あきらめるつもりはないぜ？俺。

絶対手に入れてやるさ。

「彼女、ゲットだぜ！」

って言ってやるさ。

そんな想いを抱きつつ、今日から通う新しい校門をくぐる。

プロローグ・・・ってか？（後書き）

初連載です。がんばります。

新しい制服。

俺、深山圭吾^{みやまけい}。

今日から高校1年生。

そして隣の超鈍感な姫（幼馴染）、林朱里^{はやししゅり}。

同じく今日から高校1年生。

俺たちは今日から通う高校へと向かっている。

「ねえ、ねえっ！なんだかドキドキわくわくするねー！」

朱里はそう言っただけ俺の前に行ってくるとまわる。

「なんだ、その感想。ドキドキわくわくって保育園児か？」

そう言っただけ、朱里は立ち止まって

「違うもーん！だって今の気持ちに1番あってるもん」

「可愛いでしょ、スカート！」

はつきり言っただけ……可愛い。

「でもね、圭吾だって、めちゃくちゃカッコイイ」

そう言っただけ笑う。そしてまた1回転。スカートがふわりと浮く。

あ……。

「見えた、パンツ」

嬉しくてニヤける顔を見られないように誤魔化すように言う。

それにしてもスカート短すぎんだよ。他の奴が見たらどうすんだ。

「えっ！？…圭吾のえっち」

朱里の顔がどんな朱に染まる。

見せる方が悪いんだ。見せるほうが。

「オマエもつとスカート長くしろよ」

そう言いながら朱里に近づくと

「こないでください、変態さん！！」

……あ”あ”！？

朱里はくるりと回避。…また見えた。

「スカートは短い方が可愛いの！分かんないかなあ」

スカートの裾をちょんつとつまむ。

「分かん」

朱里の横を通り抜け、速く歩いてやる。

「えっ！？わわわ、圭吾待ってよっ！」

朱里が後ろから着いてくる。

「…ぷッ」

おもわず吹き出す。…ヒヨコみたいだ。

笑っている俺を朱里は……抜きやがった。

「へへっ！圭吾、おっそーい」

小悪魔みたいに笑っていた。

でもな…俺がオマエに負けるとでも？

「…っと」

小走り続ける朱里を放って俺は止まった。

俺と朱里との間に距離ができる。

さーて、いつ気がつくかな？

じつと朱里を見て、待つ。

あ、気がついた。

「圭吾！なんでそんなとこにいるのぉ」

朱里が小走りで戻ってきた。

「一緒にいかないと嫌だあ」

そう言いながら抱きついてくる。

…色んなものがあたってる…。

オイオイ…。俺たちもう高校生だぜ……？

「そこのバカップルじゃねーんだから抱きつくなよ」

朱里を俺から引き剥がそうとすると、もっと強く抱きついてきた。

「ぐえっ…」

朱里は顔をあげると、

「いーじゃん！あたし圭吾大好きっ！」

ははは…。幼馴染として、だろ？

そっという鈍感、迷惑だ。

俺は朱里を引き剥がす。

「ふえっ」

なんか変な声を出した。

「彼氏できてからやれ」

… 本当は彼氏なんかつくって欲しくないけど…。

「うっ…。じゃあ、今は圭吾で我慢！」

…… 今は、か。

俺も朱里に抱き返せたらいいのに。

おもいつきり抱けたらいいのに。

けど、そんな勇氣はない。

だって、幼馴染だから。

恋人じゃないんだ。

俺だってもう高校生。

小学生だったあの頃とはもう訳が違う。

15の春。

新しい学校の門を潜りぬけた。

俺、Aクラス。（自慢）

ざわざわ。

校門入ってすぐに人だかりができていた。

「ねえ、ナニかなっ！？いつてみよっ！」

朱里が俺の腕をぐいぐい引いていく。…痛いって。

「クラス発表なんじゃねえの？」

きつと、そうだ。自信がある。…お、あたり。

「うーんうーん。みえない…」

朱里はぴよんぴよん跳ねる。

うさぎか、お前は。

ぴよんつと跳ねてくるりと俺の方を向いた。

「圭吾……。…抱っこして欲しいぴよん」

……。…は？

コイツ、なんて言った？今？ラッコが見たい…？無理無理。ここ学校だもん。

「う~~~~っ抱っこ!!」

はっはっは。幻聴幻聴。俺たち、コーコーセー。

「はいっ」

はああ！？まじで言ってるのか！？コイツッ!!両手広げられても困るんですけど……。

「やだ」

うん、俺正しい。

「え〜っケチだケチだッ！圭吾の鬼ッ!!」

はいはい。…ってか、ケチでも鬼でもなくね！？普通じゃね？

「ケチでけっこう」

朱里の頭をぺちぺち叩く。

「まあ、俺みてやるよ」

そう言い残してクラス表を見に行く。

えーと？深山圭吾…深山、深山つと…。

あ、俺Aクラスだ。

で、林朱里…林…林…林…林…林…？？

……まじで…？

「オマエ、Eクラスじゃん」

そういうと、朱里は…固まった。

「ウソ！？ウソウソウソ！？」

「いや、まじ」

この学校は入試のときの成績でクラスが分けられる。

全部でクラスは6クラス。

高い方から、S、A、B、C、D、E……。

うん。俺はまあまあだな。けど朱里は……。

「最下位クラスなの！？あたしっ！」

そう、最下位クラスだ。

「…もういつそ、おめでとう」

拍手、拍手。

俺の幼馴染はこんな馬鹿だったのか。

まあ、アホだとは思ってたけど。

「うつうつ。いーもん。別にいーもん。この林朱里様に負けてこの

学校落ちた人だっているもん…。大丈夫だもん…」

そういつて自分に言い聞かせる朱里。でもな…。

「ここ、今年はめずらしく定員ぴったりしか受験するヤツいなかったんだってさ」

ガーン！っていう音が聞こえた気がするが、続ける。

「しかも、最下位の合計点、5教科で32点だったさ」

ガガガガガーーーーー！

「それ、あたしじゃんか……」

え！？うつそ、まじで！？じゃあ、こいつ……

「学校で最下位じゃん……」

うわーーーーー！！！！まじでーーーーー！！？

つて、こんな幼馴染がいる俺も恥ずかしいけどね？

「わーん、圭吾おおおお」

わ、泣いた。

「はあ、とりあえず、クラスいこーぜ」

とりあえず、慰めて朱里を連れて校内に入る。

「ほわわ、校舎、キレー」

立ち直り早ッ！？

もう、校舎の綺麗さに感動している！？

「そうだな、朱里よりキレーだ」

……なんつて。

「圭吾ひどい」

あああ、また泣きそうだ。

「冗談だよ」

ああ、なんだかなあ……。

俺達は、それぞれ分かれて教室に入った。

えっと、俺の席、俺の席。

あ、ここか。

出席番号順で並べられた椅子に腰掛ける。

はあ、やれやれだぜ。

「オマエ、ふかやま？」

知らない男が声をかけてきた。

どうやら俺の後ろのようだ。初対面でオマエはないだろ…。

「どちら様で？」

俺は後ろを向く。

「ん？オレ！？オレは矢田智樹^{やたともし}！」

矢田はそういうと、俺に向かってピース。

……馴れ馴れしいヤツだ。

「で？ふかや……」

「み・や・ま、だ」

俺は矢田の言葉を遮る。

「おっと、失礼」

そうは言っているが、ちつとも失礼だと思っていないだろう。
てか、まじで馴れ馴れしくね？

「で、深山。朝一緒にいたのは彼女か？」

は？

「は？」

何言ってるの、コイツ。

「いやあ、朝イチチャイチャしてたじゃんかあ」

矢田がニヤニヤ笑う。

「違うつて。幼馴染だよ」

ああ、そうだ。幼馴染だ。

まあ、俺はそうは思っていないけどな。

「そうなのか？へー、ほー」

あんまり納得していない。

だから、困るんだよな、朱里の態度…。

矢田は俺の顔を覗き込み、そして言った。

「でも、オマエはあのコのが好きだろ？」

友達(?)。

は……？

「だ〜から〜、好きなんでシヨ？」

は……？なに言ってるんのコイツ??

「も〜うハクジョーしちやいなよ〜」

…ってか、初対面だよ、コイツと。

「うんうん、初対面〜」

…なんで知ってるの……。

「あ〜オレけっこう鋭いからね〜」

ってかさ、さつきから気になってただけどさ

「うんうん、なに？おにーサン？」

「俺の脳と直接会話するのやめてくんねえ!？」

さつきから、俺なんも喋ってないぞ……。

「な〜に言ってるんの、おにーサン」

「その呼び方やめろ」

「さつきから全部声にでちゃってますよー？あ、そうか〜!!そんなにカノジョが好きなんですかね？」

はっ…、こっちの気も知らねーで…。

「朱里は幼馴染だ」

そう、本当手のかかる幼馴染…。

…なんか自分で言ってみて悲しくなってきた…。

「朱里ちゃんっていうの？カノジョ、可愛い名前じゃん〜。……っ

てかさ、自分で幼馴染っていったいて、落ち込むのやめてもらえま

す？オレたち初対面だよ〜」

先に初対面なのに失礼してきたのはオメーだろうがよ…。

「まあ、オレたち気が合うんじゃない？」

なに言ってるの？コイツ。

「絶対合わない。俺オマエみたいな奴絶対嫌だ」

俺には親友がいたんだよ。

「くそッ……」

あゝ、ヤバ……。泣きそー……。

「うゝん、圭吾……でいいのかなあ……。コツチも傷ついてるんだけど？」

馴れ馴れしいな！やっぱ！！

「オマエは傷ついてたらしいんだ」

「オマエじゃなくて矢田智樹……ってか、ヒドッ！？」

なんじゃ、コイツ。なんか、コイツといたら気が抜ける……。

「それ、オレって圭吾の癒しの場所！？」

「違うわ！！ボケ！！」

本当コイツなんだ！？癒しどころかちよつと疲れてきたわ！！

「まあ、これからオレたち友達なっ！てか、親友！？」

はっ。もう知らねーよ。

……なんだかうざい友達（？）ができた。

Eクラス。

一方、朱里。

ど…どどど、どうしよう…ッ！！

あたしの席、1番後ろだ…ッ。

このパターン、知ってる。知ってるよ…。

中学生のときもそうだった。

しかも今回もまえの席の人、めっちゃめっちゃ背が高いッ！！

ーキーンコーンカーンコーン…

あああ！！鳴っちゃったよチャイム！

…落ち着けあたし、落ち着いて席に着くんだ…。

ガララッ！！

あああ、先生も来ちゃったよ…。

「はい、注目ー」

パンパンと先生が手をたたく。

若い先生だ。それに、けっこうカッコイイ。

「今日から担任の棗愁登だ。なつめしゅうと先生になつて、まだ2年だ。慣れなくて先生として頼りないかもしれないが、1年間よろしく頼む」

パチパチパチ…

みんなが拍手したのであたしも手をたたいた。

「じゃあ、自己紹介から入ろうかな」

そう言つて全体を見渡した。

「じゃあ、藍田から…」

あああ！！きたー。やっぱり！！

どうしよう、あたし小っさいから見えないよね…。

「えーと？次は林？林朱里！」

ううう。ゆっくりと立つ。そして、息をゆっくり吸って…

「えと、喜多見中から来ました…」

「林、立ってから自己紹介をしなさい」

ほらね。やっぱり。

「先生…立ってます……」

みんながクスクス笑う。

うつうつ……恥ずかしいよう…。

「あつと、悪い。見えなかった。じゃあ、林、そのまま自己紹介を続けてくれ……」

うつうつ、先生の、バカ。

「喜多見中から来ました林朱里です……。好きなものは……」
1日で、有名人だよ…。

「アンタ、林朱里っていうの？」

ショートホームルームが終わり、上から声が降ってきた。

「あ、はい！」

どうやら、前の背の高い人らしい。え〜と、たしか名前は…橋田…

「アタシは橋田杏^{はしだあんず}。出席番号、アンタのいつこ前だよ」

橋田さんは、なんてゆうか、カッコイイ。サバサバしている。だけど、優しいそうだ。きっと女子にも男子にも人気がある。

「よかったら、アタシと友達ならない!？」

いきなり、だった。

「へっ!？」

びっくり。

「アタシさあ、池波中からなんだけど、池波中の人誰もいないんだよね」

そう言つて、苦笑いを浮かべた。

「だから、よかったらさ、……友達になつて？」

顔が真っ赤だ…。可愛い…。

「うん！いいよ！！あたしも女友達いないんだ〜」

友達はこの学校では圭吾しかない。

「え!?!?ということは、男友達がいるの？」

あたしたちはタメ口で話せるほどもう仲良くなっていた。

「うん！自慢の幼馴染！！」

「そうなんだ！」

そういうと橋田さんは笑った。

「ねえ、ねえ、橋田さん」

「杏でいいよ」

「じゃあ、杏ちゃん」

「呼び捨てでいいのに」

杏ちゃんは笑った。

「でもこの方がしつくりくるよ」

あたしは呼び捨てで呼ぶことがほとんど無い。

「杏ちゃんって、頭よさそうなのになんでEクラスなの？それとも、やっぱり…バカ？」

本当、とても賢そうだ。バカには見えない。

「え？あゝ…」

この反応からして、やっぱり頭はいいんだ…。

あたしは最下位…。うえーん。

「入試のときにね、寝ちゃったのよ」

「ええ！？」

寝ちゃった！？

…でも、それでもあたしより点数は上ってコトか…。
なんか、泣けてきた…。

「まあ、正確に言つとアタシ38度熱があつたのよね」

「えええ！？」

「ははは。前日勉強がんばりすぎて遅くまで起きて、当日バタンキ
ユーよ。ほんと、アタシってバカだよな」

はははっと杏ちゃんは笑った。

「で？朱里はなんで？」

ううつ…。そんなの、決まってる。

「実力…です。これ以上聞かないで…」

杏ちゃんは目を見開いた。ちよつとすると笑い声が…。

あはははっ！！……杏ちゃん、大笑いだよ。

「いーじゃん！いーじゃん！！個性じゃん！！」

え？なんて？分かってくれるの？

このあたしの気持ちを分かってくれるの！？

「あ…杏ちゃんッ！！」

杏ちゃんに抱きつくとき杏ちゃんはよしよししてくれた。

「圭吾はねッ、バカにしたんだよ」

ああ、杏ちゃん優しい！！

「圭吾…って、幼馴染？」

「え？うん！！」

「まあ、幼馴染じゃね」

そういつてあたしを見た。

「今度紹介してね」

またにっこり。スマイル0円…。

「うん！」

入学初日、あたしにはすごくステキな友達ができた。

弁当。(前書き)

久しぶりの更新です。

スミマセン…。

また、これからもばちばち書いていくのでよろしくです。

弁当。

「圭吾、待つてよ」

「なにになに？怒ってんの？」

「ごめんって。謝るから許してよ」

「あ、でもついていっちゃうけど」

「ってシカト！？ヒドッ！」

だ……………つ！！！！

「うっせー！！！」

はい、こちら圭吾。つてなんか警察官みたいじゃね!?

今、俺は智樹と一緒にいます。

なぜかつて？

勝手についてきてんだよっ！

どうにかしてくれっ！！

15分前

「は、やつと昼休みじゃん」

そういつて智樹が俺をつつく。

「だから、何だよ？」

ホントにこいつは。言っとくけど、今日初対面だぞ！？

「別に関係ないって。運命だ・か・ら」

「キモッ。って、オマエは俺の脳と喋ってんじゃねーよ」

「確かに圭吾はさつきは喋ってなかった」

「は」

「でも、テレパシーで分かっちゃうのだ」

はい、嘘。なんか、コイツめちゃうくちゃ勘がいいっぽい…。

「ところで、弁当にしようぜッ!」

そういつて智樹は弁当を取り出す。

緑のチェックの風呂敷。可愛いのもってんなあ。

「なに？オレの弁当欲しいの？」

「いや、俺あるし…」

「そりやそうだろうよ…。ま、これオレが作ったし」

「は！？マジで！？」

あつ。思わず手を握ってしまった…。

「えっ？あ、おう」

「すげーな、オマエ！若干見直した…若干」

ははは。なんか微妙な空気になってっし。

「もーそんなこといつたらお嫁にいつちゃうぞっ」

あ、戻った。

「やっぱ、ウゼえ」

「なっ！？それが今日会ったばっかの奴に言うこと！？」

いやいや。先に馴れ馴れしかったのはオマエじゃん。

「俺も、弁当…ってあーーーーー！！！！！！！！！！」

「な…なんだ！？」

忘れてた…。

「俺、朱里の弁当持ってたんだった…」

———で、今に至る。

やばいな、朱里困ってんだろうな。

「俺、ちよつと渡してくるわ！」

廊下を走る。Eクラスって遠っ！！

「あ、までよ！オレも行く！」

はあ！？コイツついてきた！！

まあ、いっか。

ハア、ハア…。

「やっとなついたし…」

Eクラスを見渡す。

「あ！朱里！！」

朱里に寄っていく。でも、なんか…あれ？

「え？圭吾？」

朱里が振り向く。

「もしかして、お弁当？」

「そうだよ、ホラ」

朱里の手の平にお弁当を落とす。

「あ…ありがとー」

へへっと、朱里が笑う。やべ、可愛い。

「朱里、もしかして圭吾ってこの人？」

誰だ、このコ。

「え？あ、うん！そうです」

朱里の新しい友達…だろうか。

「あ、圭吾、こっちは杏ちゃん。新しい友達」

あ、やっぱりか。

「えと、俺、深海圭吾。よろしく」

「あ、アタシ橋田杏。よろしく」

橋田杏。なんていうか、美人だな。

朱里が可愛いだとしたら、橋田は綺麗…てきな。

「圭吾、圭吾の後ろのカッコイイ人、誰？」

なっ！？カッコイイだと！？

「はいはい！見る目あるね、朱里ちゃん」

ぐいつ。智樹が後ろから乗ってくる。お…重い…。

「はあ。なんであたしの名前？」

「あゝ、圭吾から聞いたから。で、オレは矢田智樹。よろしく」

「改めて、あたしは林朱里です。よろしくね、智樹くん」

智樹くん！？くん！？まあ、当然か…。

「あ、智樹でいいよ」

「え？じゃあ、智樹。あたしも朱里でいいです」

と・も・き、だあ~~~~~！？

「うん、よろしくね、朱里」

しゅ・り~~~~~！？

「あ、キミは橋田杏ちゃん、だっけ？よろしくね」

「……こちらこそ、よろしく矢田君」

「え？智樹でいいのに」

「いえ、矢田君の方がしつくりくるから、そっちでいくわ」

「そっか、ま、いいけど」

「コイツ、智樹の事苦手……なのか……？」

「せっかくだし、みんなでご飯食べない？」

「なっ……！？しゅ、朱里っ……！！」

「え？杏……ちゃん？」

「あっ……。ゴメン、なんでもない」

「……？そう……？じゃ、食べよう」

橋田杏……。どうしたんだ……？

「んじゃ、杏……」

「気安く名前を呼ばないでっ……！！！」

智樹が声をかけた途端に橋田はいきなり立ち上がった。

「ごめん、朱里。アタシ一人で食べるよ」

「えっ！？杏ちゃん！？……ごめん、圭吾！あたし杏ちゃんとこ行ってくる！」

「え？あ、おう」

……。

教室の雑音だけが聞こえる。智樹は黙ったままだ。どうすればいいんだ？なにが起こった？

チラリ、と智樹を見やる。

「あ……のさ、オマエと橋田、前になんかあった……？」

智樹は黙ったままだ。

「いや、分からない。……というより、忘れてしまっているのかも」

「は？」

なにいつてんだ、コイツ。それじゃあまるで…。

「オレさ、中2よりも前の記憶、ないんだ…」

……は？

弁当（後書き）

たぶん、更新なかなかできないと思います。
でも、がんばるので、よろしくです！

会ったばかり。(前書き)

はい、どうも。

久々の更新です。

長らくお待たせしました。

では、どうぞ。←←←

会ったばかり。

——中2よりも前の記憶がない…。

それは、いきなり智樹から告げられた言葉だった。

「え…。それって、記憶喪失…か…？」

恐る恐る覗き込んだ智樹の顔はいかにも「無」という言葉が似合う程暗かった。

「そうだと思う…」

「お…思う…ってオマエ…」

「しょうがないだろッ!!」

智樹が声を張り上げて言う。

「オレだって知りたいよ！だけど、過去のことを知るのはやっぱ怖いし、お袋だって教えてくれねーんだよッ!!」

「智樹…」

「なんでオレは記憶がないんだ？どうしてオレは記憶を無くした？どこで記憶を落としてきた？…そんなことさえ何一つ知らねーんだよッ!!」

クッソ…。智樹が机をたたいた。そして脱力しきった顔で微かに笑った。

「…悪い…。今日初めて会ったヤツに言うことじゃないよな…」

「とも…」

「オレ、今日は帰るわ…」

「…おう、分かった…」

俺に、智樹を励ます力なんかない。

ただ、頷くしかない。

…今日会ったばっかだぜ？

お互いの事まだまだ知らないのに、いきなり…重すぎだった。

——一方、朱里——

「ま…まって！！杏ちゃん！！」

全力ダッシュで杏ちゃんを追いかける。

すると、いきなり杏ちゃんは立ち止まった。

「えっ！？わわわっ！！止まれなっ…わぶっ」

いきなり止まった杏ちゃんに勢いよくぶつかってしまった。

「ッ… たたた…ご…ごめんね、杏ちゃん」

杏ちゃんは無言のままただただ突っ立っていた。

そしてかすかに唇を開くと、

「と…智樹…」

「え？智樹？」

「智樹ッ！！」

杏ちゃんは泣きながら崩れてしまった。

綺麗な顔が涙で濡れる。

「あつ。は…ハンカチー！！」

ポケットにしまっていたピンクのウサギ柄のハンカチをとりだして涙の後をたどらせる。

「しゅ…り…」

こつちを向いてつぶやく杏ちゃん。

一体、何があったの？

智樹とは知り合いなの？

どうして泣いてるの？

…聞きたいことだらけだった。

だけど、今は杏ちゃんの言葉を待つ。

あたしにできることはそれだけだった。

「朱里…あのね、アタシッ…」

「うん」

「今日初めて会ったばっかだけど…聞いてくれる？…朱里にならなんだか話せる気がする…。…不思議だけど」

そういつて力なく笑った杏ちゃんはどこか不安げで…

「うん…。いいよ。今日会ったばっかとか気にしないで。あたしたちもう友達なんだから。ゆっくり話して…。…ここじゃんだから、屋上でもいく？」

そういつた瞬間、杏ちゃんの顔はみるみる血の気がなくなっていく。

「い…嫌ッ！！屋上だけは…屋上だけは…どうしても嫌ッ！！！」

杏ちゃんがあたしに抱きつく。抱きしめ返したら、今にも壊れてしまいそうだった。

「あ…杏ちゃん…。…よし！今日は学校さぼっちゃおッ！！入学初日とか関係ないしッ！！それにEクラスでバカだとかも、まったく関係ないしッ！！」

もう、やけクソだ！！…バカでけっこう、こけこっこう！！

「しゅ…朱里…！？」

「うん！そうだ！！あたしん家行こう！近いし！！そうしよう！！…行くよッ！！杏ちゃんッ！！」

そういつて、杏ちゃんの腕を引っ張って教室をでた。

——一方、圭吾——

「はあ…。…なんか、大変なことになってんなあ…」

口から出るのは溜息ばかり。

「…記憶が無い…つか…」

ピロリロリッ♪

「ん…？メールか…？」

携帯を開くとそこには「朱里」の2文字が浮かんでいた。

ボタンを押してメールを開く。

「……橋田と……朱里まで帰ったのかよ！！俺1人かよ！！」

まじ、もう俺もいっそ帰ってしまおうか。

だけどな……。今日、初日だし……。

さんざん迷った結果。

……俺は、学校に残ることにした。

会ったばかり。(後書き)

あああ!! 続きどうしましょ!!
まあ、またぼちぼち更新しますんで
よろしくです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9912u/>

俺の姫サン。

2011年10月9日11時32分発行